

# 人の命を奪い続ける戦争 協力行為を即やめるべき

文と写真・西谷 文和(ジャーナリスト)



黒マスク&サングラスの警官が検問していた

私は07年10月、7度目となるイラク取材を敢行した。日本ではイラク戦争の実態が報道されなくなって久しい。現地の状況は米軍の空爆に加えてアルカイダのテロ、スンニ派・シーア派の内戦状態、武器があふれ、治安が悪くなったための単なる盗賊団の無法行為。イラクの現状は最悪の状況だ。現在進行形で進む戦争の実態をご覧いただきたい。

## 警官も自衛のために 顔に覆面、サングラス

「やばっ！あいつテロリストと違うか」。私たちの車に向かって覆面&サングラスの、肩からカラシニコフ銃を担いだ男が近づいてくる。ここはイラク北部、石油で有名な都市キルクーク。前日も自爆テロや銃撃戦があり、警察署長が撃ち殺されたばかり。

彼は警官だった。勤務中に顔を見られると、勤務時間外にテロリストに襲われてしまうので、護衛のため顔を隠しているのだった。自爆テロ現場へ。現場は古ぼけた商店街の一角。爆薬を積んだ自動車を路肩に駐車させて、携帯電話で爆発させたようだ。犯人はスンニ派のアルカイダ系

と発表されている。自動車に停まっていた場所に、大きな穴が開いている。破壊されたビルの中へ。ドアが吹き飛ばされ、自爆車のホイールやボディの破片が散らばる。

隣の肉屋さんは全壊。崩れ落ちたブロックの下敷きになってここで2人亡くなった。散乱するブロックの下から血が流れ、地面に血の池ができていく。その血にハエが群がっている。「友人の友人がアルカイダ」と交友関係の広さを「自慢」した政治家がいた。もしこんな発言をテロ被害者が聞いたなら、いったいどう思うだろう。...

## テロ被害者の手術 設備もない病院

テロ被害者を取材するた



重傷のムラト君を別の病院へ移送した

め、キルクーク病院へ。カマルさん(32歳)は、あの肉屋さんの前で並んでいた一瞬の閃光、気がついたら足、胸、腹、頭に爆弾の破片が飛び込んでいた。「アウー、アウー」、窓際のベッドからうめき声が。「ああこれはひどい」思わずため息が漏れる。ムラト君(13歳)の右目はつぶれ、頭には大きな包帯、そして全身大やけどを負っている。左胸に刺さった破片が心臓近くに達しているため、危篤状態。早くこの破片を取り除かねばならないが、キルクーク病院には手術できる設備がない。

## 病室の廊下へ 血が流れ出している

4日後、再びキルクーク病院へ。2階に上る。階段右手の病室から廊下へ血が流れ出している。昨日テロリストに銃撃された患者が、たった今亡くなったのだ。ここはまるで野戦病院だ。ムラト君は少し落ち着いていて、ストレッチャーに乗せて救急車まで運ぶ。ここからスレイマニアまで2時間を持ちこたえてくれれば、生き残れる。私たちは折るような気持ちで救急車を追いかける。病院から



200万人を超えるといわれるイラクの国内避難民。この冬を越せるのだろうか(カアラ避難民キャンプ)

銃撃され、死亡した患者の血が廊下へ流れ出している(キルクーク病院)

チェックポイントまで20分程度。この間が危険。病院の門を出たとき、「ヤバニー、ヤバニー(おい、日本人が乗っているぞ)」と通行人が叫んだ。見つかつたのだ。「デンジャラス！」通訳のフアドゥーンが叫びながらアクセルを踏み、猛スピードで駆け抜けていく。私はといえば、ひたすらチェックポイントまで後部座席に身を潜める。やがて。無事チェックポイントを通過。

スレイマニア大学病院。診察した医師が「相当なト」

## カラア避難民キャンプ は埃と異臭が

この戦争の結果、莫大な数の難民が生まれている。スレイマニア郊外に「カラア避難民キャンプ」がある。荒涼とした、草木も育たない砂と石ころばかりの赤茶けた大地。そこにこつぜんとなんと数百のテントが現れる。埃と異臭にまみれた異空間。それがカラア避難民キャンプである。

「2006年3月にバグダッドから逃げてきた。最初、ここにテントを張ったのはわずか3家族だけ。しかしあつという間に広がって、今では見てのとおりだよ」。最初に逃げてきたワリードさんは、今や約150家族、5000人にふくれ上がった避難民の代表だ。テントとテントの間には生ゴミが山積みされて、そこに無数のハエがたかっている。衛生状態は最悪。

フーティマさん(45歳)がテントの隅に寝転んでいる。一ヶ月前から徐々に体調が悪くなり、ひどい下痢に悩まされ、いまは寝たきりの生活になってしまった。胃の中に石が溜まっているらしく、病院に行く、「手術をしないと治らない」と言われた。しかしお金がなくてテントに戻ってきた。日本人が珍しいのか、それともビデオカメラが珍しいのか、インタビュ中に子どもたちがわんさか寄ってくる。いずれの子どもも学校に行っていないので、時間をもてあましていたのだ。木とロープで作った即席ブランコがある。この避難民キャンプの唯一の遊具。ブランコに乗る子どもたちの姿を撮影している時も、「病気のな、助けて」「援助を、お願い」など、各テントから私たちに声がかかる。

## 暖を取るのには 家族で添い寝だけ

イラクは年中乾燥してい

るが、冬だけまとまった雨が降る。テントでは雨漏りがするし、夜間はかなり冷え込む。暖を取る手段が、薪を燃やすことと、家族全員で「添い寝すること」だけである。せめて毛布を配れないだろうか。このキャンプができてもう2年目を迎える。風邪による病死、下痢による衰弱死などは、統計上「イラク戦争での戦死者」にはカウントされないのだ。

ほしい。62年前、私たちは二度と戦争をしないと誓った。なのに日本は、戦争を停めようとせず、ひたすらアメリカに追随している。給油だけではなく、一切の戦争協力行為をすぐにやめるべきだと感じる。

## 「新テロ特措法」

# まともな議論なきまま国会で成立

この原稿を書いている時点で、国会では「3分の2条項」を使って、「新テロ特措法」が成立した。インド洋で給油を続けるかどうか、議論の中心だが、肝心の「アメリカの戦争、テロとの戦いに協力すること」についてどうなのか、という議論はされなかった。人の命を奪い続ける戦争の是非について、真剣に議論して

西谷さんが代表を務める「イラクの子どもを救う会」事務局は06-6192-7033  
●同会への募金は、三井住友銀行吹田支店 普通口座3712329 口座名義「イラクの子どもを救う会 西谷文和」  
●郵便振込 口座番号00970-5-222501 口座名義「イラクの子どもを救う会」